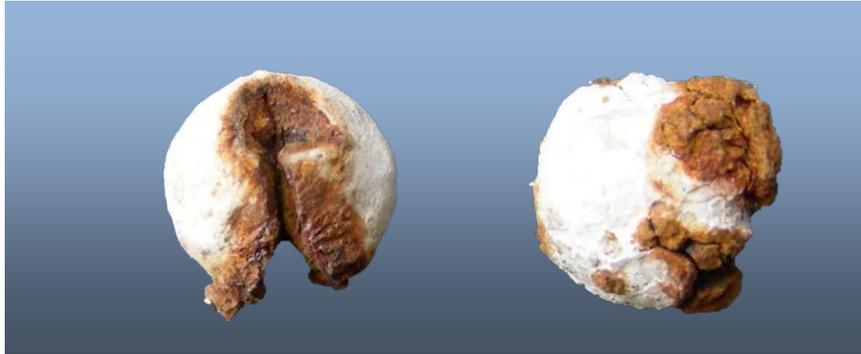


火縄銃の弾丸

黒田官兵衛の戦の跡か



出土遺跡

上毛町 桑野遺跡

この鉛玉は火縄銃の弾と考えられます。天文12（1543）年、現在の鹿児島県種子島に漂着したポルトガル人が我が国に初めて火縄銃を伝えたといわれています。時は戦国時代、新しい武器は急速に広まり、当時の日本は世界最大の銃保有国であったともいわれます。

天正15（1587）年、九州を平定した豊臣秀吉は、豊前国8郡のうち、企救（現北九州市）・田川郡を除く^{くろだよしたか}中・南部6郡を黒田孝高（^{かんべえ}官兵衛）に与えました。現在の福岡県^{みやこ}京都郡・築上郡、大分県中津市・宇佐郡などです。これらの地域は、13世紀以来、鎌倉幕府から派遣された宇都宮氏一族が勢力を持っていました。

一説には、豊臣秀吉は、この宇都宮氏を伊予（現愛媛県）へ移そう（転封）としたそうですが、宇都宮氏は先祖伝来の地を離れることを望まず、黒田氏にも従わず、根拠地であった城井谷（現築上町）に籠もりました。

天正15（1587）年10月、黒田孝高（^{かんべえ}官兵衛）の長男の長政が城井谷を攻めたものの、逆に命からがらの^{てい}体で敗走しました。これに勢いついた上毛郡（現豊前市・上毛町など）の土豪（小城主）たちが蜂起して、上毛郡「観音原」で黒田軍と戦い、敗れ去りました。

「^{かんのんぼる}観音原」は現上毛町の「^{かのぼる}桑野原」であったといわれています。この鉛玉はその「桑野原」の発掘調査で出土したものです。

下線の付く言葉の解説は裏面にあります



火縄銃の歴史

火縄銃は15世紀前半にヨーロッパで発明されました。銃口から黒色火薬と鉛または鉄製の玉を入れ、火縄を用いて点火するものです。ヨーロッパではその後改良が加えられましたが、江戸時代の日本は戦争もなく、鎖国していたこともあって幕末まで大きな展開はなかったようです。国内では大阪府堺や滋賀県が一大生産地でした。

銃身長1m前後、口径10mmの鉄砲の有効射程は200m、最大射程は500mに達するそうです。なお、現在の競技では27mの距離に置いた13cmほどの的で競います。

宇都宮氏

宇都宮氏は島津・大友氏などと同じく源平合戦の後、それまで平家が領有していた土地を鎌倉幕府から与えられて関東から来た西遷御家人で、九州の武家としては名家といってもよいでしょう。宇都宮氏は豊前国府（現みやこ町国作）に近い仲津郡（現みやこ町犀川木井馬場）に入り、後には築城郡（現築上郡）城井谷に本拠地を移します。

長い間に宇都宮氏は多くの分家を生み出し、その一族は福岡県東部（主に現築上郡・豊前市）、大分県北部（現中津市・宇佐市）の豊前國中・南部に広く土着していました。ただ、一族の紐帯が弱かったようで、結束して宗家を立てて豊前を治めるといったことはほとんどなく、豊前は長く大友・大内両氏の草刈り場的な状況となっていました。

黒田氏が豊前国主として入り、中津城を築いて新体制の安定を図る中で、宇都宮一族は従わないのみならず、各地で反乱（一揆）を起こしました。現築上町寒田の天然の要害に籠もっていた宇都宮鎮房に手を焼いた黒田氏は、天正16年4月（17年説もある）、鎮房の娘を官兵衛の嫡子（後継者）長政の嫁にするという和解策をもって中津城におびき出し、宴席で謀殺したという話が伝わっています（黒田家の正史『黒田家譜』では、官兵衛不在の時に突然鎮房が大勢で長政に面会に来たので、無礼打ちにしたというようなことになっています。）。

この話にまつわる次のような言い伝えもあります。中津市街地に赤壁で有名な合元寺があります。鎮房に従った家臣の休憩所とされていましたが、黒田氏はここを急襲して全滅させました。以来、白壁はいくど塗り替えても血が滲んで赤く染まるので、赤壁にしてしまった、というものです。



参考文献：福岡県教育委員会 2008 『豊前バイパス関係埋蔵文化財調査報告第6集下巻
桑野遺跡 小松原遺跡 上の熊遺跡』

写真：当館撮影